



TITLE:

京都帝國大學經濟學會大會記事

AUTHOR(S):

委員

CITATION:

委員. 京都帝國大學經濟學會大會記事. 經濟論叢 1924, 19(1): 148-148

ISSUE DATE:

1924-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128178>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京 叢論濟經

號一第 卷九十第

行發日一月七年三十正大

論叢

所得本體の不明確又は捕捉難……法學博士 神戸 正雄
 に基く不公平課税の可能……法學博士 財部 靜治
 道德統計概論說……

フォン・ウイゼの社會學論……文學博士 米田庄太郎

海運同盟に對する政策……法學士 小島昌太郎

時論

米國の排日立法より生すべき……法學士 作田 莊一
 重大なる結果……

說苑

諸國の自作農創定事業……法學博士 河田 嗣郎
 獨逸レンテン銀行に就て……法學士 大森 研造

雜錄

勞農露國に於ける幣制改革問題……經濟學士 谷口 吉彦
 京都帝國大學經濟學會大會記事……委員

京都帝國大學經濟學會大會記事

京都帝國大學經濟學會第六回大會は五月二十九日午後一時より法學部第一教室にて開かる。田島、神戸、山本、本庄、作田、中西、諸教授講師の出席あり、聴衆は例によりて立錫の餘地を殘さず。劈頭山本學部長は開會の辭を兼ねて京都帝國大學經濟學會の沿革事業を述べられ、引續き會計報告ありて講演に移る。

まづ中西講師は「貨幣價值論としての限界効用説」の題下に二時間に亘りて講演を試みらる、序論として簡單に限界効用説の説明を與へ、それより一般價值論としての限界効用説の批判に及び、主觀的性質的なる効用より客觀的分量的なる價值を測定することは、到底不可能なりと斷じ、更に限界効用説論者が往々にして効用と需要とを混同せる誤謬を指摘し、又限界効用説はよし消費財に適用され得ることも生産財には適用されずとし、最後に貨幣價值論としての限界効用説の吟味に移り、凡そ限界効用説の内容をなす三命題即ち(イ)一定の時一定の財貨に對する効用は一定す(ロ)財貨の効用に對する認識は財貨の分量に應じて遞減するものなること

(ハ)財貨の價值は効用によりて因果的に説明せらるゝものなることは、貨幣價值に適用されざるを論證して貨幣價值論としての限界効用説の支持し難きを論ぜらる。

次に作田助教授は「内より觀たる國家」といふ論題に於て、團體の意義分類より説き起して國家を普通一般の目的を有する親和的融合關係なりとし、更にそれが特徴として(イ)精神の內在的要求より生ずる團體なり(ロ)普通の目的としての團體なり(ハ)全體本位心意の結合なり(ニ)絶對自律の強制なり、の四をあげて論旨を明にし、一轉して事物の研究方法には外察的方法と内觀的方法とあること、及び二方法相俟つて事物の真相を明にし得るものなれども、就中内觀的方法の必要なることを高調し、吾人は米國や英國の國家を外察的方法のみを以てしては眞實に知り得ざるものなることを例證せられ、興味多き講演は茲に終りを告ぐ。

最後に、山本學部長の開會の辭あり、時に午後五時、それより學生集會所に於て同好會の大會を開催し教官學生一堂に會し歡談す。會をどむたるは午後の九時すぎ、星は燦然として空に輝く。